

1998 年度関東教区教会婦人会連合 第 24 回総会・修養会

(於・伊香保・ホテル天坊)

1998.6/4

開会礼拝説教「一つの体、多くの部分」(1 コリト 12:26-27) (讃 90,194,544)

渋川教会 小鮒 實 牧師

「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」の小鮒でございます。今日から明日にかけて「関東教区の教会婦人会連合第 24 回総会・修養会」がここ「伊香保のホテル天坊」で持たれます。「地元」と言うのでしょうか、少し離れておりますけれども、まあ一番近い教会ということで、渋川教会の私が「開会礼拝」のご奉仕をすることになりました。「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」の小鮒でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

ところで、皆様方は「渋川駅」からこちらの方に来られた方も多いと思いますけれども、渋川と言いますと、「日本の真ん中」、いわゆる「日本のヘソ」ということで、「ヘソ祭り」というものが行われます。今年は7月の 24、25 日頃だと思っておりますけれども、ヘソを出して踊るヘソ踊りとか、あるいは、山車が出たり、夜店があつたり、結構いろいろあつて面白いお祭りであります。まあ詳しいことは、オプションツアーの名(迷)ガイド、名ガイドの「メイ」という字はどういう字を書くのか、ちょっと忘れましてけれども、とにかく「名(迷)ガイド」の方がおられますので、お聞きいただければと思いますが、渋川もそれなりにいろいろなことをやっております。今年は渋川から伊香保に上がってくる途中に「スカイランド・パーク」(高い観覧車が見えましたでしょうか、スカイランド・パーク)というものもオープンいたしまして、5月4日には入園者が10万人になったということで喜んでおります。まあ、渋川は人口五万にも満たない小さな町、現在は四万八千数百人の小さな町ですけれども、小さいながらもいろいろなことをやっております。

で、今渋川のお話を少しさせていただきましたので、ついでに私たちの渋川教会のお話も少しばかりさせていただきたいと思っておりますが、渋川教会は、1919年、大正8年の12月25日、栗原陽太郎牧師によって創立され、来年はちょうど教会創立80周年を迎えます。群馬県では創立100年を越える教会が沢山ありますから、渋川教会はそんなに古い教会とは言えませんけれども、でも80年近くもの間、神様に守られ、導かれて来たことを思いますとき、やはり神様に感謝せざるを得ません。また、渋川教会には付属の幼稚園(信愛幼稚園というのですけれども)、付属の幼稚園がありまして、細々とではありますけれども幼児教育にも取り組んでおります。この幼稚園は、1924年にできた幼稚園で渋川では一番古い幼稚園でありますけれども、でも現在は園児28名。私が赴任してまいりました時、3年前は園児12名でありました。しかも、宗教法人立の幼稚園ですから、いつつぶれてもおかしくない、そんな状態であります。で、去年は「伝道し奉仕する教会」、副題として「幼稚園を支えましょう」という標語を掲げて、みんなで頑張つてまいりました。具体的には、去年から「預かり保育」というのを始めまして、教会員の方々が交代で、保育が終わってから午後5時近くまでボランティアでお残りの子供たちの面倒を見て下さった訳であります。おかげでやっと園児が28名になりました。でも幼稚園としてやっていくにはやはり厳しい数字であります。

それからもう一つ渋川教会には、目の不自由な方が沢山おられまして、点字の聖書や讃

美歌は勿論備え付けておりますけれども、その他いろいろな取り組みをしております。礼拝に出席出来なかった人には、礼拝テープを送ったり、また、教会報や教会総会の資料などもテープに録音して届けたり、また、毎週の週報は、電子メールで送ったり、まあ最近では便利な機械が出来まして、インターネットでメールを送りますと、それを音声に変換してくれる、逆に、音声で、声でメールを送ることも出来る、そういうとても便利な機械も出来ました。まあ、いろいろな取り組みをしている訳ですが、教会にはもう一つ大きな問題があります。どこの教会もそうかも知れませんが、教会員の高齢化の問題。昨年、一人20代の青年が受洗いたしました、平均年齢が1歳若返りました。でも、それでも現在の教会員の平均年齢は62歳。高齢者と呼ばれる65歳以上の方は現在ちょうど半分、30人おります。これは深刻な問題でありまして、これからは教会でも高齢者の問題に真剣に取り組んでいかなければならない、そういう時代になって来ております。まあ、それぞれの教会でいろいろな課題があると思いますけれども、大変な時代になって来たことを実感しております。

ところで、先程、去年の標語のお話を少しいたしましたけれども、今年の渋川教会の標語は「キリストの体なる教会」。聖書の言葉は、先程お読みいただきました、第一コリントの12章27節の言葉「あなた方はキリストの体、また、一人一人はその部分です」という、この言葉を取り上げました。口語訳の聖書では「あなた方はキリストの体であり、ひとりびとりはその肢体である」となっておりますけれども、この言葉は、私たち教会に連なる者にとって、とても大切なことを教えている言葉だと思っております。「あなた方はキリストの体」、それはキリストの体である教会は一つであるということ。体は一つ。そして、「一人一人はその部分、肢体である」というのは、教会に連なっている人は、それぞれ一人一人皆大切な働きをしているということでもあります。まあ当たり前のことですが、この当たり前のことを教会の中で本当に当たり前にしようということで、私たちの教会は、今年、この聖句を選びました。

ところで、この言葉は勿論「教会の姿」を謳っている訳ですが、教会婦人会連合の皆様方にもまた当てはまるものではないでしょうか。教会婦人会連合という一つの組織があって、全体として大切な働きもなさっている訳ですが、また同時にそれぞれの教会での働き、いわゆる各個教会の婦人会の働きもある。そして、このそれぞれの教会での働きもとても大切なものである訳であります。ということで、今日の開会礼拝の聖書の箇所も同じにしてみた訳ですが、「一つの体、多くの部分」。これは12節の前の小見出しに使われている言葉であります。「一つの体、多くの部分」で、この12節以下の所には、大切なことがいろいろと記されておりますが、私の心に特に響いてまいりますのは、20節以下の言葉であります。20節から読んでみますと、こんな言葉が記されております。「だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようと、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。」

ここには、弱者をいたわるような、そういう言葉が沢山出てまいります。「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要である」。「体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようと、見苦しい部分をもっと見栄えよくする」。また「神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられた」。

教会には、いろいろな人たちがおりますけれども、関東教区にも、またいろいろな教会があります。立派な教会もあれば、見劣りのするような教会もある。私たちの教会は、見かけはそれなりにやっているようにも見えるかも知れませんが、経済的には火の車であります。昨年は66万円の赤字が出まして、会堂を維持するために積み立てておりました積立金を取り崩して、やっと帳尻を合わせました。牧師も一週間に二日間はお出稼ぎに出ています。まあ、こういうことはあまり言わない方がいいとおっしゃる方もおられると思いますので、これ以上は申し上げませんが、現実には極めて厳しい教会もある。これは私たちの教会だけでは決してないと思うのであります。しかし、神様は立派な教会も、そうでない教会も、弱く見える教会、恰好が悪いと思われる教会、見劣りのする教会、そういう教会も一つ教会として「組み立てられた」。本当に慰められる言葉であります。

ところで、パウロは、先程の言葉の中で「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要だ」と言っておりますけれども、これはどういうことでしょうか。どうして教会にはほかよりも弱く見える部分がかえって必要なんだろうか。パウロは言います。それは「体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うためだ」(25)と。この25節の言葉は、口語訳の聖書では、このように訳されております。「それは、体の中に分裂がなく、それぞれの肢体が互いにいたわり合うためなのである」。教会には「ほかよりも弱く見える部分がかえって必要」。それは教会が分裂せず、お互いがお互いのことを「配慮し合うため、いたわり合うため」だというのであります。

で、私はこの言葉を読むとき、三浦綾子さんの「塩狩峠」という小説の中に出てくる、主人公永野信夫の友だち、吉川の言葉を思い起こします。吉川は足の不自由な自分の妹ふじ子のことについて、こんなことを信夫に語るのであります。

「そうだよ、永野君、ぼくはたった今まで、ただ単にふじ子を足の不自由な、かわいそうな者とだけ思っていたんだ。何でこんなふしあわせに生れついたんだろうと、ただただ、かわいそうに思っていたんだ。だが、ぼくたちは病気で苦しんでいる人を見ると、ああかわいそうだなあ、何とかして苦しみが和らがないものかと、同情するだろう。もしこの世に、病人や不具者がなかったら、人間は同情ということや、やさしい心をあまり持たずに終るのじゃないだろうか。ふじ子のあの足も、そう思って考えると、ぼくの人間形成に、ずいぶん大きな影響を与えていることになるような気がするね」と言うのであります。そして「病人や、不具者は、人間の心にやさしい思いを育てるために、特別の使命を負ってこの世に生れて来ているんじゃないだろうか」と吉川は考える訳であります。不快語もあるかも知れませんが、あえて原文のまま引用しました。

私は、この吉川の言葉の中で特に「もしこの世の中に、病人や不具者がなかったら、人間は同情ということや、やさしい心をあまり持たずに終るのじゃないだろうか」という言

葉、それから「病人や、不具者は、人間の心にやさしい思いを育てるために、特別の使命を負ってこの世に生れて来ているんじゃないだろうか」という言葉に特に感銘を受けました。勿論、こまかい事を言い出したら、障碍を持っている人に対して同情するなんていかにとか、同情するなら金をくれとか、あるいは、不具者なんて言葉は使うなとか、いろいろあると思いますけれども、でも、病人や障碍を持っている人が実際にこの世の中に生きている、生かされている。その大切な意味を教えている言葉のようにも思うのであります。特に「病人や、障碍を持っている者は、人間の心にやさしい思いを育てるために、特別の使命を負ってこの世に生れて来ているんじゃないか」という発想、これはとても大切な発想のようにも思うのであります。勿論、じゃ、障碍者はどうなのか、人にやさしい思いを育てるためだけに存在しているのか、障碍者の気持ちは考えなくてもいいのか、というような反論もあろうかと思えますけれども、でも、病人や障碍を持っている人に対して、「ただ、かわいそうに思う」、そういううわべの気持ちと比べれば、とても大切な発想のようにも思うのであります。

ところで、パウロは「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要だ」と語り、それは「体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うため、互いにいたわり合うためだ」と教える訳ですけれども、更に、このことを言い換えて、こんなふうに語ります。26節の言葉「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」。

ここには「一つの部分」と「すべての部分」という事が語られております。これは「個と全体」と言ってもいいかも知れません。ある人が悩み苦しんでいる時、ほかの人も皆共に悩み苦しむ。重荷を分かち合う。あるいは、ある人が尊ばれば、みんなでその喜びを分かち合う。一人の人の問題が全ての人の問題になり、ある一つの事柄が全ての人の共有になる。個と全体がそこで一つになる、そういう世界。それが教会であります。そして、それは、各個教会と教区、あるいは、各個教会と教団の関係においても同じようなことが言えるのではないかと思うのであります。私は教区教会制とか、教区は教会ではないとか、そんな理屈は言うつもりはありません。ある教会が困っているならば、他の教会も共に悩み、重荷を負い合う。また、ある教会に喜ばしいことがあれば、他の教会も共にその喜びを分かち合う。そういう教区や教団であって欲しいと思っているだけであります。幸い関東教区では、そのことのために「ナルドの壺献金」をはじめ、いろいろな互助制度などもありまして頑張っている訳ですけれども、今日は関東教区の総会議長、原田史郎先生も講師でおいでくださっておりますので、あえて「更に、更に頑張る欲しい」と申し上げたいと思います。また、関東教区の教会婦人会連合においても、是非「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」、そういう教会のあるべき姿を念頭において、ますますすばらしい働きをなさって行って欲しいと思います。お互いがお互いのことを覚え、祈り合い、支え合い、これからも豊かな交わりを続けて行っていただければと思います。